

非行誘発のリスク要因としての貧困
－ 司法統計年報と犯罪社会学研究からの考察 －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
川島 英輝

本研究では、非行と貧困の関係性について文献資料を用いて検証した。

方法は以下の3つである。①日本の非行・犯罪について社会的な視点で研究が行われている「犯罪社会学研究」（1979年～2016年）の中で「貧困」という語がどのような使用傾向があるか KH-coder2 を使ってテキストマイニングを実施した。②司法統計年報（1952年～1998年）の中の家庭の生活程度（富裕層、普通層、貧困層）というものを縦断的に取りまとめ、家庭裁判所に送致されてきた少年のうち、貧困層にあるとされる少年がどの程度いるか調べた。③司法統計年報の家庭の生活程度と犯罪カテゴリーのクロス集計を縦断的に取りまとめ、犯罪カテゴリーごとに生活程度の割合に偏りがどうか調査を行った。

その結果、①では「犯罪社会学研究」において貧困は、1980年をピークにする非行第三の波で指摘された、「貧困家庭出身の少年が減少し中流家庭出身の少年が増加した」、という文脈で最も多く使用されていたことがわかり、過去の研究では貧困は非行誘発のリスク要因として大きく捕らえていないことがわかった。②では、司法統計年報における貧困層の判断基準が1963年までと1964年以降で全く異なる基準を採用していた可能性が明らかになった。また、家庭の生活程度の記載が除外された1998年まで、貧困層は一度も増加することはなく、減少し続け非行に貧困が大きく影響していたとは言い難い結果であった。しかし③で、犯罪種別ごとに生活程度を見ると、ぐ犯というカテゴリーでは貧困層が占める割合が全体の割合よりも2倍近く高かった。

したがって、非行という現象をマクロの視点で見たとき、貧困は非行を誘発させる大きな要因と言えない、認識されていなかった。しかし、ある特定のカテゴリーなどミクロの視点に注目すると、貧困が非行を誘発させる要因として作用している可能性が示唆された。